

【小牡鹿】 さをじか

鹿は古くは「カ」といい、♂を「シカ」、♀を「メガ」といったようです。そのうち両性ともに「シカ」というようになりました。♂に雄(牡)が付き牡鹿「オジカ」、接頭語「サ」が付き「さ牡鹿」、「サ」に「小」の字を当てて「小牡鹿」となったようです。「さ」をつけると音が柔らかく聴こえますね。

その他、小男鹿・佐を鹿・さ雄鹿などなど様々に表記するようになりました。

古来、日本人にとって鹿は二つのイメージを持った動物でした。

ひとつは、物悲しい秋のイメージ。もうひとつは神の乗り物、神の使いとしての神聖なイメージです。

前者は、牡鹿が八月から十月頃まで牝鹿を求め「ピーツ」「ヒョヒョヒュー」と高い声で鳴くためです。この声が哀愁に満ち秋のもの悲しさを感じさせるのです。そのため鹿を詠んだ歌には切ない恋の歌か、秋のものがなしさを詠んだ歌が多いようです。

- ・夕されば小倉の山に鳴く鹿は今宵は鳴かずい寝にけらしも 舒明天皇『万葉集』
(夕方になると鳴いていた小倉山の鹿は今宵は鳴かない 寝てしまったらしい)

後者は、古代の鹿卜[しかうら]という占法に始まります。鹿の肩骨を焼いて生じた折裂の紋により吉凶を占う方法です。亀卜より古く『古事記』天石屋戸の段などに見られます。

また武甕槌命[たけみかつちのみこと]が神鹿に乗り常陸国鹿島宮から御笠山に影向し、春日大社第一殿に鎮座したという伝承を本に「鹿曼荼羅」が鎌倉時代より描かれるようになりました。鞍に榊、神鏡などの依代を乗せた牡鹿図で、移座する神を表わしています。このように鹿は春日大社と深く結び付き、春日大社に祖を祀る藤原家(近衛家)の好む意匠となりました。

- ・かすがのの みくさをりしき ふすしかの つのさへさやに てるつくよかも

会津八一

[春日野ノ ミ草折り敷キ 臥ス鹿ノ 角サエサヤニ 照ル月夜カモ]

寿老人は七福神の一柱。巻物を付けた杖を携え、玄鹿、白鶴を連れている長寿の神です。仏教の世界では十二天の内、風天の禽獣座はノロシカという鹿の一種です。

古代インドの『ジャータカ』(本生譚・仏陀前世の物語)に鹿本生が数話あります。

その中で最も有名なのは紀元前一世紀のバールフット出土のレリーフにも描かれている「ルル前生物語」ではないでしょうか。

「ルル前生物語」とは、道楽が過ぎて借金が返せなくなった男がガンジス河に身を投げ、激流に

ながされているところを金色の鹿王に助けられる話です。

鹿王は自分の住処を明かさないことを約束させ、救出した男を人里に返してやりました。

ところがこの男は褒美欲しさに鹿王の住処を人間の王に伝えてしまいました。

鹿王は人間の王の鹿狩の獲物となりますが、裏切り者の仕業であることを人間の王に訴えます。

心ある王は恩知らずの男を糾弾しますが、鹿王は逆に男の許しを請います。

感じ入った王は鹿王を逃がしてやりますが、鹿王は人の作る穀物を荒らさないことを約束するの
でした。鹿が穀物を荒らさないのはこのためと伝えています。

『ジャータカ』は日本人に馴染まないように思われるかもしれませんが。

しかし、法隆寺玉虫厨子に描かれた「捨身飼虎」「施身聞偈」の話は『ジャータカ』から漢訳経
典に訳され日本に伝わったものです。

徳島の菓子「小男鹿」は山芋・鶏卵・小豆等に和三盆糖を加え蒸した棹物です。美味しいですよ。

これはお薦めです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~